

形成外科初期臨床研修プログラム（選択科）

研修責任者 辻本賢樹

研修期間のめやす：4週～

（※将来、外科系医師を志している者は8週以上の研修を推奨します）

I. 対象となる疾患・病態

対象となる疾患・病態は、およそ以下の通りである。

体表面の外傷(とくに顔面)

顔面骨骨折(前頭骨、鼻骨、眼窩、上顎、頬骨、下顎など)

熱傷およびその後遺症

先天奇形(耳・顔面・手足・臍など)

皮膚良性腫瘍・悪性腫瘍

がん切除後などの組織欠損に対する再建手術(乳房再建など)

褥瘡・難治性潰瘍

きずあと・ケロイド・瘢痕拘縮

眼瞼下垂、わきが、その他の整容的な問題 など

II 研修到達目標

一般目標(GIO:General Instruction Objective)

形成外科は、一言で表すならば「見た目の外科」である。形態や機能の異常を、主に外科的手段によって正常に戻すことを目的としている。このプログラムでは、「形成外科領域における代表的な疾患の診断法・治療法を理解し、基本的な手技を習得する」ことを目指す。

行動目標(SBOs :Structural Behavior Objectives)

① 創傷治癒の理論を学び、実践する

創傷の種類とそれぞれの特徴を知り、状況や部位に応じて適切な処置ができるようになる。

各種の軟膏、創傷被覆材、陰圧閉鎖療法についてその長短を理解し、使い分けができるようになる。

② 各種の縫合法・植皮法を習得する

縫合糸の特徴を理解し、適切な使い分けができるようになる。

皮下縫合、真皮縫合、皮膚縫合の要諦を理解し、合理的で速く正確な縫合ができるようになる。

分層植皮・全層植皮・各種バリエーションのそれぞれの目的と特徴を理解する。

採皮から植皮片固定、術後管理にいたるまでの一連の手技ができるようになる。

③ 顔面骨骨折の基本的知識を身に着ける

特徴的な理学的所見・画像所見について理解し、診断ができるようになる。

緊急性の有無について判断でき、適切な初期対応ができるようになる。

手術方法を中心とした骨折治療の要諦を理解する。

- ④ 熱傷について初期対応や手術療法などの治療、後遺症への対応などについて理解する熱傷の深度判断ができるようになる。
初期対応や適切な手術時期および方法の選択ができるようになる。
創治癒後に生じる後遺症など QOL 低下する要因や治療可能な後遺症について理解する。

Ⅲ. 方略

- ① 外来および病棟において、指導医とともに創傷を診察し、創処置を行う。
 - ② 手術室や外来において、指導医の下で各種縫合を行う。
手術室において、指導医の下で採皮、縫着、固定、ドレッシングの各手技を行う。
 - ③ 外来および病棟において、指導医とともに顔面外傷患者の診察を行う。
画像所見についてみずから評価し、その後指導医とともに検討を行う。
手術室において、助手として骨折整復術を経験する。
- ※ その他
- 受け持った症例については、カンファレンスにおいて発表し、治療方針の決定にも積極的に関与する。
- 形成外科領域の学会（日本形成外科学会各関連学会、創傷外科学会、創傷治療研究会など）に参加し、症例報告などを行うこともある。

Ⅳ. 評価

獲得した形成外科的知識・技術の確認を、ローテーション終了時に行う。必要に応じて、研修期間の途中でも適宜確認を行うことがある。

Ⅴ. 研修医への提言

QOL を重視した医療が求められる昨今、形成外科が担う役割は大きくなってきています。たとえ将来どの科にすすむにせよ、形成外科医の視点とマインドを身につけておくことは、あらゆる医療場面においてかならず役に立つはずで、当科は「見た目の外科」であり、「結果の外科」です。講義や教科書で二次的に学習するだけでは、絶対にその存在意義や真価を理解することはできません。数週間という短い期間であっても実地に見聞し、体験するという真の意味での知ることが重要であり、それがあなたの医師人生の貴重な財産となり得ます。